

ボルベール—帰郷—

2007(平成19)年4月27日鑑賞(角川映画試写室)

★★★★



監督・脚本＝ペドロ・アルモドバル／出演＝ベネロペ・クルス／カルメン・マウラ／ロラ・ドゥエニャス／ヨアンナ・コバ／ブランカ・ポルティージョ／チュス・ランプレアヴェ（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年スペイン映画／120分）

第3章

ヒロインの個性・職業も千差万別

……そのタイトルどおり、これはアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたスペインの名花ベネロペ・クルスを中心とした6人の女たちが紡ぐ物語。主人公と母親との確執がなぜ生まれ、主人公の娘がなぜ父親殺しを……？ また、亡くなった伯母さんの良き隣人が、なぜ今失踪した母親捜しに固執を……？ スペインのラ・マンチャを舞台として展開されるそんな女たちの数奇な物語は、きっとあなたの胸に感動を呼ぶはず……。犯罪を含めたミステリアスな要素も多いが、母娘の再会と和解を女たちと共に率直に喜びたいものだ……。



登場人物は6人の女性だけ……

一口に「女性映画」といってもいろいろな範疇があるが、この映画はスクリーン上に登場するのが6人の女性だけと言っても過言ではないほど、ホントに女性だけの物語を紡いだ女性映画。6人の女性の中核となるのは、失業中の夫の分まで働き、15歳の一人娘パウラ（ヨアンナ・コバ）を育てながら明るく力強く生きているライムンダ（ベネロペ・クルス）。それに絡むのが、ライムンダの姉のソレ（ロラ・ドゥエニャス）と隣人のアグスティナ（ブランカ・ポルティージョ）。

そして物語の発端は、ライムンダとパウラそしてソレが、故郷のラ・マンチャに住んでいるパウラ伯母さん（チュス・ランプレアヴェ）の家を訪れたところから。このパウラ伯母さんは認知症が進んでいるうえ目が見えないから、1人暮らしは不自由なはずだが、なぜか今日は訪れてきたライムンダたちに対しておやつを出してくれたりしたから、こりゃ不思議……？

冒頭の物語は衝撃的！

最近の日本は、親子殺し・兄弟殺しの事件が多発しているが、実はそれはスペインでも……？ それは冗談だが、この映画は娘による父親殺しという物騒な物語によって女性映画ながら急にミステリー色が……？

ライムンダやソーレと一緒にパウラ伯母さんへの訪問を終えて家に戻ってきたパウラが、椅子の袖に一方の足をかけてテレビを観ていると、今日も仕事をクビになったからと言って、スポーツ番組をずっと観ていたらしい父親の目にはスカートの中から開いた両足のつけ根が丸見え……？

ライムンダから「足を閉じなさい！」と注意されてすぐに正したものの、スペインでも今ドキの若い女の子の行儀はこんなに悪いの……？ しかし、問題はそれ以上に、そんな風に娘のスカートの中を覗き込む父親……？ さらにこの父親は、娘が着替えている姿をドアのすき間からそっと覗いたりしていたから、この家にはきっと何かが起こりそう……？ そう思って観ていると、今日仕事から帰ってきたライムンダを、雨に濡れながらバス停でじっと待っていたのがパウラ。ひと言も口をきかず、思い詰めたような彼女の表情を見れば、何か問題が発生したことは明らかだったが、パウラは口をきかないまま……。そしてやっと家にたどり着き、ダイニングルームに入ったライムンダが見たのは、何と包丁で腹を刺され、血まみれになって死んでいる夫の姿。これは一体……？

死体の処分にも、たくましさ……？

ライムンダはすぐにカットとなる気性の激しさが唯一の欠点だが、『マレーナ』(00年)のモニカ・ベルッチ、『バイオハザード』(01年)のミラ・ジョヴォヴィッチらと並んで、世界最高水準のプロポーションを誇るベネロベ・クルスが、わざと「付け尻」をしてまで強調したそのたくましさは、夫の死体処分という場面においても発揮されることに……。

パウラが父親を包丁で刺したのは、「本当の父親じゃないから……」と言いながら父親が関係を迫ってきたから、というから、一体この家族はどうなっているの……？ 娘のこの一言ですべての状況を把握したライムンダは、以降テキパ

キと死体を片づけたうえ、留守中のカギを預かっていた隣のレストランの大きな冷凍庫の中に、ひとまず夫の死体を隠すことに……。これにて一応の死体の処置は完了したが、さて警察の捜査はこの後どうなるの……？

ライムダとソーレの両親は火事で死亡したはず……？

そんな大事件が発生した夜、間の悪いことにとうとうパウラ伯母さんも死亡。そんな中、ライムダが義理を欠くことは承知のうえで、その葬儀をとりあえず姉のソーレにまかせたのはやむをえないところ……。ところが、パウラ伯母さんの葬儀のためにラ・マンチャに赴いたソーレは、近所の人たちから、火事で父と共に死んだとされている母親イレネ（カルメン・マウラ）の姿を見かけたという奇妙なうわさを耳にすることに……。

動揺するソーレに対して、パウラ伯母さんの親戚な隣人で、パウラ伯母さんの様子をいつも注意してくれていたアグスティナは、「ラ・マンチャでは、幽霊が現れるのはよくあること」と言うから、これまた不思議なお話……。そのうえ、葬儀を終えて自宅へ戻ってきたソーレの車のトランクの中には、何とそのイレネの姿が……。「これぞ幽霊……」とソーレは驚いたが、実は……？

ロシア女の登場は……？

ソーレは美容院を営んでいたが、この日を境にスペイン語のしゃべれないロシア女1人を店員として雇用することに……。もっとも、それは一般のお客様相手だけで、ライムダが訪れてくる時は、ベッドの下に隠れ、じっと息をひそめることに……。このように、ロシア女がライムダとの再会を頑に拒んだのは一体なぜ……？ ホントの幽霊ならともかく、生身の人間を1人余分に匿うことになるとやはり生活臭が漂ってくるのは当然。しかも間の悪いことに、ライムダがソーレの家に入ってきた時、亡くなった伯母さんの洋服や宝石類などを持ち帰っていることを発見されたから、ソーレはライムダからあらぬ疑いをかけられる羽目に……。まあ、この程度の誤解はやむをえないかも……？

アグスティナにも大きな悩みが……

パウラ伯母さんの隣人アグスティナも1人で生活しているようだが、これも何か曰く因縁がありそう……？ そう、アグスティナの母親は昔から失踪（プチ家出）癖（？）があったところ、今回はある朝突然いなくなってから、その失踪期間があまりに長すぎて心配だというわけだ……。

そんなアグスティナから、パウラ伯母さんの死亡直後にライムンダにかかってきた電話によると、アグスティナもガンにかかっていることが判明したとのこと。1人暮らしでこれから先が短いと悟ったアグスティナは、自分が生きている間にどうしても失踪した母親の生死を確認したいため、ライムンダに対して、いろいろと調べてくれるように依頼した。しかし今はそれどころではなく、自分のことで精一杯のライムンダはこれをやんわりと拒否……。

そこで、アグスティナは、「尋ね人、探します！」のようなテレビ番組への出演を決心して出演したものの、やはり家族の秘密をテレビの前でしゃべることには拒否反応が……。さて、アグスティナの母親は、今一体どこに……？ そして、警察はこの件についても一体どんな認識を……？

ライムンダには、こんな仕事が1番……

レストランの冷凍庫内に隠した死体をどう処理しようかと考えていたライムンダに対して、たまたま声をかけてきたのは映画撮影で近くに来ていたクルーたち。しばらく撮影が続くため、30名のスタッフに食事を提供してほしいという注文を受けたライムンダは、レストランの持ち主からカギを預かっていることをいいことに、これを快諾。以降、毎日ライムンダには忙しく楽しい生活が続くことに……。

美人で抜群のプロポーション、そして胸の谷間をかなり大胆に見せたライムンダが仕切るこのレストランは大繁盛。明るくてたくましく、そして美人のライムンダには、掃除婦よりよほどこの仕事の方がピッタリ……。

母と娘の再会は……？

ところがある日、ソーレの家を訪れたライムンダが鼻に感じたのは、懐かしい

母の匂い。日本人と異なり、ヨーロッパ人は体臭が強いからよけい感じやすいのかもしれないが、それ以上に不注意だったのは、ライムダが訪れている時に思わずしてしまったイレネのおなら……。前々から何となくソーレの様子がおかしいと感じていたライムダにも、今やっと状況が把握できたよう……。そこでやっと、ソーレもコトの真相をランダエタに語り、ここにやっと、ライムダと母親イレネとの「ご対面」が実現することに……。

🎬 『ボルベール（帰郷）（VOLVER）』とは……？

今日は撮影クルーたちの打ち上げパーティー。ライムダが用意したたくさんの料理や酒に参加者は上機嫌。そんな中、ギター之音に耳を留めたライムダは、クルーたちに対する感謝の意を込めて、一曲披露することに……。その歌は、タンゴの不朽の名作といわれている『ボルベール（帰郷）（VOLVER）』だ。娘のパウラもライムダの歌を聴くのははじめてだと言っていたが、実は姉のソーレは、ライムダがオーディションを受けるため母親の指導を受けて一生懸命この曲を練習していたのをよく知っていた……。楽しく騒いでいたレストランの中は一瞬静まり、ギターと手拍子に乗って歌うライムダの心を込めた歌声は、その様子を少し離れた車の座席の中から秘かに眺めていたイレネの耳にもしっかりと……。この歌詞の日本語訳はプレスシートに載っているが、哀愁を帯びた美しいメロディーと美しいペネロペ・クルスの歌声だけではなく、あなたも是非自分の目で、その歌詞の意味をしっかりと確認してもらいたいものだ。

🎬 母と娘の「和解」シーンは圧巻……

ペドロ・アルモバル監督は、この映画のラストに女性映画らしい母と娘の和解というすばらしいシーンを用意した。映画の途中、母親イレネが姉のソーレの前にはすなりと登場して、すぐに打ち解けるのに対し、なぜかライムダに対しては姿を隠したまま。それは、ライムダの娘パウラの前に正体を現した後もそのまま変わらなかった。したがって、撮影隊クルーの打ち上げパーティーにおけるライムダの美しい歌声も、イレネは車の中で秘かに聴いていただけだった。それは一体なぜ……。？ ネタバレになるためそれをここに書くわけにはいかない

が、娘のライムンダが母親のイレネを完全に拒否し、1人外へ出て行ったことにはそれなりの深刻な理由があったのは当然……。また、そんな体験をもつライムンダだからこそ毎日を強く生きてきたし、娘パウラの「父親殺し」の現場に立ち会った時も、パウラのため精一杯の対処をすることができたのだった。

そうすると、火事で夫と一緒に死んだはずのイレネが、再びソーレやライムンダの前に登場してきたのは一体なぜ……。その秘密がこの映画の最後のシーンでイレネの口から語られるから、その長いシーンには是非注目しよう。

母、娘そしてその娘と3代続いた女たちの数奇な運命に驚きを感じるとともに、その「帰郷」に大きな感動が湧いてくるはず……。

アルモドバル監督にとっては、文字どおりの帰郷……

この映画を監督・脚本したのは『トーク・トゥ・ハー』(02年)で有名なスペインのペドロ・アルモドバル監督。私は知らなかったが、彼はスペインのラ・マンチャ出身とのことだから、まさにこの映画は彼にとっての帰郷。またこの映画において、ソーレとライムンダ姉妹の母親役として登場するカルメン・マウラは、特に1980年代のアルモドバル作品の常連で、「アルモドバル監督のミューズ」と言われていた女優とのこと。したがって、そんなミューズと19年ぶりの共同作業になったのがこの映画だから、その意味でもアルモドバル監督にとっては帰郷……。

弁護士目で見ると……

この映画は、ペドロ・アルモドバル監督の女性映画として、またベネロペ・クルスの魅力をいっばいに発揮させた映画として絶品だが、弁護士目から見ると若干疑問点も……。それは、ライムンダの娘パウラによる「父親」殺しを、いかにもハッピーエンドで終わらせていること……。また、死んだはずのライムンダの母イレネの突然の出現と、パウラ伯母さんの隣人アグスティナの母親の失踪について、映画のラストにおいてイレネに告白させておきながら、その法的処理をあいまいなままにしていること……。こんな視点で映画を観るから弁護士は嫌われるのかもしれない。たしかにそんな法的処理の問題は、映画本来のストーリーや6人の女性がこの映画でみせる精一杯の生き方のすばらしさには無関係な

こと……？ したがって、私は決してそんな視点からこの映画の出来にケチをつけるつもりはないが、一応指摘することだけはしておきたい……。

アカデミー賞主演女優賞ノミネートは……？

この映画で主演した典型的なスペイン美女で彫りの深い顔立ちの女優ベネロペ・クルスは、私にとっては『バニラ・スカイ』（01年）、『コレリ大尉のマンダリン』（01年）、『トリコロールに燃えて』（04年）での演技が印象的。大きな目、大きな唇そして大きな胸は女の強さの象徴（？）で、一人娘パウラに対する愛や、曰く因縁のある母親イレネとの再会とその愛を印象強く演じた本作で、見事に2006年度第79回アカデミー賞で主演女優賞にノミネートされた。

さらに驚くべきは、何とこの映画に登場した6人の女優たちは、第59回カンヌ国際映画祭で全員が女優賞を受賞するという快挙をなし遂げたこと。それほどこの6人の女ばかりの演技は密度が濃く、家族を想うそれぞれの女たちの情感がタツプリと表現されているということだ。ヨーロッパ映画の中でもスペイン映画はあまりポピュラーではないが、少なくともイタリアのモニカ・ベルッチと並んでスペインのベネロペ・クルスの名前と顔はきっちりと覚えておかなければ……。

2007(平成19)年5月1日記

